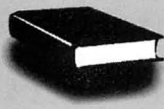


書評 新刊 紹介



Greuter, W., Barrie, F. R., Burdet, H. M., Chaloner, W. G., Deloulin, V., Hawksworth, D. L., Jergensen, P. M., Nicolson, D. H., Silva, P. C., Trehane, P. & McNeill, J. (eds.): *International Code of Botanical Nomenclature (Tokyo Code)*, adopted by the Fifteenth International Botanical Congress, Yokohama, August-September, 1993. Regnum Vegetabile volume 131. xviii+389 pp. Koeltz Scientific Books, Königstein 1994. 価格 DM 60.00 (約 5000 円) . ISBN 0080-0694.

1993 年夏に横浜で開催された国際植物科学会議においても、命名規約の改定に関する部会が討議を行い、総会の承認を得て、国際植物命名規約の新しい版が発行された。今回の版は "Tokyo Code" と略称されることになった。この版でもいくつかの点で改訂がなされた。

全体の構成について、これまでの版では条文が削除されても番号だけは残され、76 条までであったが、第 50 条以下で番号を付け替えて、62 条までとなった。規約の適用範囲は前文第 7 項で「藍藻 (Cyanobacteria)、ツボカビ類・卵菌・粘菌を含む菌類；光合成原生生物と分類学的に関連のある非光合成生物」とされた。

タイプに関して今回も重要な変更がある。第 8 条 2 項に「分類群名のタイプ標本は永久保存されなければならない」という規定があるけれども、例外的に実例において酵母の *Candida populi* で、凍結乾燥された Strain CBS 7351 は代謝的に不活性な状態で永久保存されているとすることを認めた。Holotype などの原記載の時に用いられた要素が曖昧で厳密な名前の適用の役に立たないことが確認されたとき、その代わりに使用するために選ばれたタイプを "epitype" とし、そのときに holotype などを明示するという規定が第 9 条 7 項として加えられた。

植物分類群の階級を表す術語のうち、植物門について "divisio, division" に加えて "phylum" も認めた (第 4 条 2 項)。次の Congress で承認されれば、2000 年 1 月 1 日以後は、発表された名前は国際植物分類学会が指定する登録機関に印刷物を送って登録することになる (第 31 条 1, 2 項)。

これまで著者引用で "ex" と "in" が名前を準備した者と正規に発表した著者との間に挿入されることがあり、この二つの前置詞の使い分けが曖昧であった。今

回第 46 条では、"ex" のみを著者引用の場合に用いることとし、"in" は文献引用の場合に限ることになった。

名前の安定性を求める機運が強まり、これまで忘れていた名前を復活させるよりも、保留と棄却を提案することにより、変更をしない方向での努力が求められ、これは Congress の最後の総会の決議にも盛り込まれている。この線に沿って属名や科名の保留だけでなく、種名の保留も同様の手続きで行えるようになった。まだ藻類では種名の保留は行われていない。属名に関しては、"Names in Current Use (NCU)" という目録が発行され、これに採用された名前は保護されるということが企画されたが、60% の多数を得ることができず、決定には至らなかった。しかし、命名部会としては「分類学者はこの目録中の名前と競合するか、適用を変更する名前を使用しないように要求する」ことを決定した。

科名の保留に関しては前回の Congress では決定に至らなかった。今回は藻類についても科名の保留が採択された。これは特定の棄却名に対して保留するもので付録 IIA には Acrochaetiaceae, Bangiaceae, Chromulinaceae, Cladophoraceae, Euglenaceae, Eupodiscaceae, Isochrysidaceae, Lomentariaceae, Nemastomataceae, Ochromonadaceae, Oscillatoriaceae, Plocamiaceae, Polyidaceae, Retoriamonadaceae, Rhodometaceae, Siphonocladaceae, Stigonemataceae, Tetrarasporeae, Trentepohliaceae, Vacuolariaceae が収録されている。属名の保留には 25 属が加えられた: *Coscinodiscus*, *Cymbella*, *Tetracyclus*, *Karotomorpha*, *Schizogonium*, *Abedinium*, *Amphilothus*, *Dinamoebidium*, *Degelodinium*, *Keppenodinium*, *Latifascia*, *Sphaeripara*, *Hesperophycus*, *Leptonematella*, *Grateloupia*, *Griffithsia*, *Halymenia*, *Neurocaulon*, *Phymatolithon*, *Schizymenia*, *Botrydiopsis*, *Centrtractus*, *Monodus*, *Ophiocystum*, *Tetraedriella*。また *Gracilaria* のタイプ種が *G. compressa* に変更されている。

付録 V として 1700 年代に発行された書籍のうちで、命名上採用しないものが 29 列挙された。このなかには Rumphius (1755) の *Herbarii amboinensis...* があり、この著作の中で発表された属名は正規の発表としないとされた。しかし藻類には関係するものはない。

"Berlin Code" は大橋広好氏による日本語版がつけられ、1992 年に津村研究所から発行されている。"Tokyo Code" も日本語版によって利用しやすくなることが期待される。

(北海道大学理学研究科生物科学専攻 吉田忠生)



渡辺真利代・原田健一・藤木博太（編）

Waterbloom アオコ その出現と毒素

vi + 257 pp., 1994, 東京大学出版会, 4738 円

夏期の富栄養湖沼に大発生するアオコに毒素があること、外国では有毒アオコによる被害が100年以上前から報告されていることを耳にした会員はすくなくないであろう。わが国でも1978年に編者の一人渡辺真利代によって諏訪湖に発生するアオコに毒性があることが報告されて以来、いくつかの湖沼で有毒アオコの出現が報じられている。アオコの毒、特に有毒 *Microcystis* が生産する毒素にかんしての研究は、Botesら(1984)がはじめて毒素の構造決定を行って以来、飛躍的に進展してきている。本書はこれらの研究成果を分かりやすくまとめたものである。有毒アオコの発生は、湖沼を多目的に利用している人間にとって関心をもちざるをえない問題であり、今後の湖沼保全を考える場合に避けておれない問題であるともいえる。このような状況で、有毒アオコに関しての近年の研究成果をまとめたものが出版されることを望んでいた人は多かったと思われる。本書の刊行はこの意味では極めてタイムリーであったといえる。

本書の主要な内容として、水の華をつくる藍藻にはどんなものがあるのか、有毒藍藻の出現状況と被害、有毒藍藻類の代表的な藻類である *Microcystis* 属と毒素マイクロシスチンについて、有毒藍藻類の培養法と毒素の生産に及ぼす環境要因、毒素（特にマイクロシスチン）

の化学と分析、マイクロシスチンの急性毒性、藍藻毒の毒性発現、毒素の発がんプロモーション活性について等がまとめられており、この分野に関心をもつものにとってこのうえもない情報が含まれている。特に、第8章の藍藻毒の毒性発現については、極めておもしろい内容がもりこまれている。例えば、マイクロシスチンの作用機構について著者のユニークな考えが紹介されており、ぜひ一読することを薦める。マイクロシスチンの作用機構に関する今後の研究の展開をどのように行うべきか考える上においても重要な知見を提供してくれるはずである。さらに、第9章の毒素の発がんプロモーションについては、その発見が著者の研究グループでなされたこともあって、研究プロセスもふまえて紹介されており、結果のレビューだけの記述からは得られない感銘をうける。また、第2章の水の華をつくる藍藻についても、全体の中では極めて地味ではあるが、著者の長年にわたるコツコツとした研究の成果が凝縮されている。水の華を形成する藍藻類の分類と種の特徴について、丁寧に記述されており、これらの知見が第4章に記述されている分子分類の基礎ではなくむしろ目標となっているといっても過言ではない。水の華を形成する藍藻類の分類についてこのように詳細にまとめた例はなく、もっとページ数をさいて、生態的な記述をくわえたらよかったのではないかとも思う。

全体的にみると、毒素の自然界での動態についての記述が不十分であること、リスク評価についての記述がないこと等の残念なところはありますが、そんな残念なところも忘れてしまうような内容が多くふくまれており、ヒット作品になるのはまちがいない。

(国立環境研究所 渡辺 信)

和文誌編集委員会から

和文誌編集委員会では会員の方からの記事の投稿と企画の希望を募っています。随筆や先輩から後輩への提言、苦言、若手からの提案など自由に書いて下さい。また「総説と解説」「研究技術紹介」「採集地紹介」「藻類の教材化」などの欄でとりあげてほしいことがありましたらお知らせ下さい。委員会で検討してできるだけ実現したいと思います。「藻類についての質問」もお近くの編集委員までご自由にお寄せ下さい。